

コプト語他動詞の形態変化と名詞抱合*

宮川 創 So MIYAGAWA

関西大学東西学術研究所, 京都大学言語学専修, ゲオルク・アウグスト大学ゲッティンゲン・エジプト学コプト学専修
 キーワード: コプト語 (アフロ・アジア語族), 形態論, 他動詞, 形態変化, 名詞抱合

[要旨] コプト語 (アフロ・アジア語族エジプト語派) は様々な品詞に state による形態変化がある言語である。本稿では、他動詞の state による形態変化とそれに関連する名詞抱合について論じる。他動詞の state の変化は絶対形・前名詞形・前代名詞形がある。前名詞形は名詞もしくは名詞句の前に置かれ、韻律的に後続する語に依存する形態である。他動詞前名詞形は目的語に前接し、目的語とともに一つの韻律語をなす。このため、この言語現象は名詞抱合 (noun incorporation; NI) と呼ばれてきた。本稿では、この現象が、接語である他動詞前名詞形が名詞句を支配する統語的な擬似名詞抱合 (pseudo noun incorporation; PNI) と形態論的操作である純粋な名詞抱合に二分できることを言語類型論的な観点から実証する。さらに、この2つの内、純粋に形態論的な操作である本来の名詞抱合は、Mithun (1984) の Type I と Type II の名詞抱合に二分できる。本稿によって、名詞抱合を持つ言語が少ないとされるアフリカ大陸 (Caballero et al. 2008:396) において、コプト語は、比較的生産性のある名詞抱合を持つ希少な言語であることが示された。

1 コプト語における state による形態変化

コプト語とは、アフロ・アジア語族エジプト語派に属するエジプト語の、コプト文字で書かれた一変種を指す。エジプト語は、遅くとも紀元前 32 世紀頃に象牙製のタグに刻まれた古拙ヒエログリフの文献から、現在のコプト・キリスト教会の典礼文で用いられ、かつ言語復興運動で復興しつつあるコプト語まで、5000 年以上にわたる書記記録を有する言語である。コプト語はそのエジプト語の最終段階である。本発表では、コプト語他動詞の state と呼ばれる語形変化とそれに関連する名詞抱合の再解釈を行う。なお、この発表で扱うコプト語の方言はサイド方言 (サヒド方言) である。コプト語の名詞・動詞・前置詞・助動詞・転換詞には state と呼ばれる形態変化が存在する。state には絶対形 (absolute state), 前名詞形 (prenominal state)*¹, 前代名詞形 (prepronominal state) の 3 種類がある。絶対形は、必ず強勢をもち、それ一語で文を成り立たせることができる自立語である。これに対して、前名詞形は、必ず強勢を持たず、通常母音が弱化し、強勢を持つ後続の名詞類に韻律的に依存し、それ自体で文を成り立たせることができない。前代名詞形は、必ず人称接尾辞 (コプト語文法学の用語では接尾代名詞 *suffixal pronoun*) が後続し、助動詞と転換

* 長屋尚典先生, 小川芳樹先生, 山本恭裕先生, 吉田樹生氏, 谷川みずき氏, 菱山湧人氏, 諸隈夕子氏, 外賀葵氏, 東京大学言語学研究室の長屋研の学生諸氏からは、本稿について非常に有益なご意見を頂いた。同時に、Eitan Grossman 先生, Martin Haspelmath 先生, 宮岡伯人先生, 下地理則先生, および下地先生の文法記述ゼミに筆者とともに参加中の諸氏からは、本稿の前提となるコプト語の語性に関する筆者の議論について非常に有益なコメントを頂いた。ここに深く感謝の意を表す。

*¹ アフロ・アジア語学の用語で構成形 (construct state) とも呼ばれる。また、ラテン語を用いて *status nominalis*, *status constructus* とも呼ばれる。前代名詞形は、ラテン語で *status pronominalis* 他に、前人称形 (prepersonal state) とも呼ばれる。宮川 (2018) では、前名詞形を名詞接続形、前代名詞形を代名詞接続形と呼んでいる。なお、コプト語の音素表記において、ギリシア語系借用語は、コプト語ではどのような音素が用いられていたか完全には解明されていないため、大文字で表す。

詞では強勢を持たないが、名詞・動詞・前置詞では強勢を持つ。表 1 を参照されたい。

state ↓ 品詞 →	名詞	自動詞	他動詞	行為者分詞	前置詞	助動詞	転換詞
絶対形	強勢	強勢	強勢	—	—	—	—
前名詞形	無強勢	—	無強勢	無強勢	無強勢	無強勢	無強勢
前代名詞形	強勢	—	強勢	—	強勢	無強勢	無強勢

表1 コプト語品詞におけるそれぞれ state と強勢の有無 (代名詞は複雑なため省略)

これらの state の分布には偏りがあり、動詞では、自動詞は全て絶対形のみを持ち他の state を持たないのに対して、他動詞は多くの語が3つの state を持つ。そして、他動詞前名詞形に後続する名詞類と前代名詞形に後続する人称接尾辞は意味的にその他動詞の目的語となる。その他動詞が絶対形の場合は、例 1a のように、目的語の名詞類に目的語標識である *n-* (例 1b では、順行同化した *m-*) が前置される。それに対して、その動詞が前名詞形の場合は、例 1b のように、目的語は直接動詞に後続し、目的語が韻律上強勢を有し、無強勢の動詞前名詞形を韻律的に束縛し、動詞と名詞が一つの韻律語を形成する。なお、本稿のコプト語例文は、筆者が KELLIA プロジェクト研究員として開発に貢献し、全米人文科学基金によって支援されているコプト語タグ付き多層コーパスである Coptic SCRIPTORIUM (<https://copticcriptorium.org/>, 最終閲覧日 2020 年 10 月 12 日) のものを用いている。

(1) $\text{c}\omega$ <*sô*> 「飲む」の state 形態変化: Σ^A = 絶対形, Σ^N = 前名詞形, Σ^P = 前代名形

a. $\text{qna}\text{c}\omega$ $\text{mmo}\omega$ (絶対形 $\text{c}\omega$ *sô* /'so/)

f-na-sô *m-moou*
/fnɛ.'so m.'mɔw/
3SG.M-FUT-飲む. Σ^A OBJ. Σ^N -水. Σ^A

「彼は水を飲むだろう」 (Path: life.aphou > life.aphou.02 (norm_group 324 - 335))

b. $\text{qna}\text{c}\epsilon\text{mo}\omega$ (前名詞形 $\text{c}\epsilon$ *se-* /sə/)

f-na-se-moou
/fnɛ.sə.'mɔw/
3SG.M-FUT-飲む. Σ^N -水. Σ^A

「彼は水を飲むだろう」 (Path: sahidic.ot > 19_Psalms_109 (norm_group 52 - 62))

c. $\text{c}\epsilon\text{na}\text{c}\omega\omega$ (前代名詞形 $\text{c}\omega\omega$ *soo-* /'so:/)

se-na-soo-f
/sə.nɛ.'so:f/
3PL-FUT-飲む. Σ^P -3SG.M

「彼らはそれ (水) を飲むだろう」 (Path: sahidic.ot > 26_Ezekiel_04 (norm_group 272 - 282))

例 1b のように、目的語標識なしに、他動詞の前名詞形が目的語を直接後続させ、動詞と名詞が一つの韻律語をなす現象は名詞抱合に見える。実際、Grossman (2018:140-141) や Grossman (2014:204) は 1b のような例を抱合 (incorporation) と呼んでいる。通常、Mithun (1984:889) が言うように抱合とは非常に統

語論的操作に近い形態論的操作である。しかしながら、Grossman (2018, 2014) は、形態論と統語論の分け隔てなく、抱合 (incorporation) を使用しているようである。本稿はコプト語の名詞抱合が類型論的にどのような位置を占めるのかについて追求する。

2 名詞抱合 (noun incorporation; NI) と擬似名詞抱合 (pseudo noun incorporation; PNI)

まず、典型的な抱合を有する言語としてアイヌ語の例を挙げる。アイヌ語は他動詞が目的語を抱合することがあるほか、自動詞がその意味上の主語を抱合する場合や目的語と動詞の間に充当接頭辞を挟んだ抱合などがあるが、例では、他動詞がほかの接頭辞なしに目的語を抱合する最もシンプルなタイプを例示する。ここでは、*a=* は他動詞に付属する人称接語、*=an* は自動詞に付属する人称接語であり、名詞抱合によって結合価減少の操作が行われていることが言える。なお、例文とグロスは小林 (2008) によるが、訳は筆者のものである。*a=* と *=an* は不定人称だが、ここでは1人称として用いられている。

(2) アイヌ語：孤立した言語 (小林 2008:207)

- | | |
|--|--|
| a. <i>set a=cari</i>
檻 1=～をばらす
「私は檻をばらす」 | b. <i>set-cari=an</i>
檻-～をばらす =1
「私は檻をばらす」 |
|--|--|

アイヌ語の場合、動詞の母音には変化がない。一方、ポナペ (ポーンペイ) 語には、名詞抱合の際、動詞の母音に変化する例がある。このポナペ語の名詞抱合による他動詞の形態変化はコプト語のそれに似ている。

(3) ポナペ (ポーンペイ) 語：オーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派ミクロネシア諸語 (例文・訳は Rehg 1981:214; グロスは Mithun 1984:850)

- | | |
|--|--|
| a. <i>I kanga-la wini-o.</i>
I eat-COMP medicine-that
“I took all that medicine” | b. <i>I keng-winih-la.</i>
I eat-medicine-COMP
“I completed my medicine-taking.” |
|--|--|

アイヌ語のような典型的な名詞抱合の場合、抱合する対象は常に語であり、句であることはない。それに対して、コプト語では事情が異なる。コプト語タグ付き多層コーパスである Coptic SCRIPTORIUM を用いて筆者が行った最新の分析では、例 4 のように、名詞句も他動詞前名詞形が「抱合」する例が多数確認された。

(4) ΠΔΙΑΒΟΛΟΣΔΕ ΔΥΜΕΡΠΗΤΗ ΜΠΕΙΩΤ (コプト語サイド方言)

- | | | |
|---|---|---|
| <i>p-diabolos=de</i>
/pDIABOLOS.DE
DEF.SG.M-悪魔.M.Σ ^A = だが ³ | <i>a-f-meh-p-hêt</i>
ʔɛ.f.məh.'phet
PST-3SG.M-満たす.Σ ^N -DEF.SG.M-心.M.Σ ^N | <i>m-p-eiôt</i>
m.'pjot/
の-DEF.SG.M-師父.M.Σ ^A |
|---|---|---|

「だが悪魔は師父の心を満たした。」 (Path: martyrdom.victor > martyrdom.victor.03 (norm_group 1 - 6))

例 4 の動詞 *meh-* は韻律的には *host* である後続語 *p-hêt* 「(その) 心」に依存しているものの、統語的には、名詞句である *p-hêt m̄-p-eiôt* 「師父の心」の head となりこの名詞句を目的語として支配している。そのた

め、Zwicky (1985) などの分類では、この動詞前名詞形 *meh-* は接語である。動詞に自立語形と接語形の区別がある言語は宮古語伊良部方言などがあるが、伊良部方言では自立語形・接語形の変化がある動詞は一部であるのに対し、コプト語は多くの他動詞でこの区別がある言語であるといえる。

(5) 宮古語伊良部島方言 (日琉語族南琉球諸語): 自立語形 (*a*)*si*, 接語形 =*si* 「する」 (下地 2018:182)

じつは、コプト語の分かち書きは bound group (BG) と呼ばれる単位で分かち書きされている。これは、強勢を共有する韻律的単位であるが、文頭の BG に韻律的に依存する、通常は文動詞の対比や順接などを表すディスコース・マーカーである Wackernagel clitics (WC) が BG 内に挿入されないという文法語的要素も併せ持つ。コプト語および古代エジプト語の文法アウトラインである Haspelmath (2014:123–126) では韻律的な面を取って BG を stress group と呼んでいる。このように BG は Dixon and Aikhenvald (2002) の区別では、phonological word であることには変わりはないが、grammatical word の要素も部分的に持っているため、様々なコプト語文法家たちがコプト語において「語」という単位を用いることを避けてきた*2。Haspelmath (2016) では、コプト語は「語」という単位が成り立ちにくいことから、通言語的な研究における「語」の使用を批判する内容となっている (より詳しい語性の議論については Haspelmath 2015 を参照せよ)。しかしながら、コプト語は、形態素のまとまりを韻律的・文法的に幾層にも設定すべき言語である。筆者は作業仮説として、現在コプト語の「語性」(wordhood) について 4 つの段階を設定している。

(6) 語性が強い: 1 自立語的絶対形 (Σ^A), 自立語的前代名詞形 > 2 WC > 3 接語的前名詞形 (Σ^N), 接語的前代名詞形 > 4 接辞的前名詞形 (Σ^N), 派生接辞: 語性が弱い

前名詞形が接語であれば、それによる句構造は形態論の領域ではなく統語論の領域であるため、例 4 のようなコプト語の抱合は、Massam (2001) の言う、より統語的な語から構成される疑似名詞抱合 (pseudo noun incorporation) であると解釈されうる。

(7) ニウエ語: オーストロネシア語族マレー・ポリネシア語派ポリネシア諸語

a. 疑似名詞抱合をしない場合

Takafaga tūmau nī e ia e tau ika.
 hunt always EMPH ERG he ABS PL fish

“He is always fishing” (例文・訳は Seiter 1980:183a:69; グロスは Massam 2001:157)

b. 名詞 *ika* 「魚」が疑似名詞抱合されている場合

Takafaga ika tūmau nī a ia.
 hunt fish always EMPH ABS he

“He is always fishing” (例文・訳は Seiter 1980:184a:69; グロスは Massam 2001:157)

c. 名詞句 *kofe kono* 「苦いコーヒー」が疑似名詞抱合されている場合

Ne inu kofe kono a Mele.
 PST drink coffee bitter ABS Mele

“Mary drank bitter coffee” (Massam 2001:158)

*2 Haspelmath (2016) にそのまとめがある。

オーストロネシア語族のうちのオセアニア諸語でよく見られる PNI では、PNI される名詞句は specificity (モキル語について Mithun 1984:850), あるいは referentiality (ニウエ語について Massam 2001:171) を持つことはできない。それに対して、コプト語の前名詞形は、例 4 のように、固有名詞や定冠詞がついた特定のモノコトを表す名詞句でも疑似名詞抱合ができる。ニウエ語のように、疑似名詞抱合できる名詞が限定されているのに対して、コプト語の場合、これまでの観察では、疑似名詞抱合できる名詞が限定されていないことから、コプト語の疑似名詞抱合は、より統語的な自由度が高いといえる。これに対し、Coptic SCRIPTORIUM コーパスでは、一部の他動詞前名詞形とその意味上の目的語である裸名詞が複合語を形成する純粋な名詞抱合も観察された。これらは、コプト語文法では compound verb (Layton 2011:140–142) と呼ばれ、通常他動詞前名詞形と名詞句の組み合わせとは区別される。これらは、句を抱合せず、動詞と抱合名詞の間にどの要素も含まれないことから、この複合動詞中の他動詞前名詞形は複合語の前部要素であると考えられる。コプト語の純粋な名詞抱合は特定の名詞と動詞の組み合わせの複合語である。その組み合わせの数は PNI の組み合わせの数よりも少ない。この純粋な名詞抱合の中の他動詞前名詞形は、動詞と名詞から形成された複合語の一部となっているから、もはや接語ではない。そのような、コプト語の形態論的な操作である純粋な名詞抱合には、Mithun (1984) が定義する、結合化を減らし自動詞化する Type I の名詞抱合、および、さらに目的語の項をとる他動詞となる Type II の名詞抱合がある。例は Coptic SCRIPTORIUM コーパスで見られた Type I の名詞抱合の一部、例は Type II の名詞抱合の一部である。

(8) コプト語サイド方言名詞抱合 Type I

a. $\alpha\chi\pi\epsilon\omega\eta\rho\epsilon$

n-f-čpe-šêre

/ɲf.ɕpə.'ʃe.rə/

CONJ.Σ^P-3SG.M-産む.Σ^N-子.M.Σ^A

「そして彼は子を得た」(Path: pseudo.athanasius.discourses > soul_body (norm_group 1447 - 1458))

b. $\alpha\chi\iota\omega\pi\epsilon \epsilon\mu\alpha\tau\epsilon \nu\epsilon\iota\eta\eta\mu\eta\lambda$

a-u-čī-šīpe

/ʔɛw.ci.'ʃi.pə

PST.Σ^P-3PL-受け取る.Σ^N-恥.M.Σ^A

emate nci-n-hmhal

/ʔə.'ma.tə ɲ.k'ɪm.hɪm.'hal/

とても NOM-DEF.PL-下僕.M/F.Σ^A

「下僕たちはとても恥じた」(Path: pseudo.chrysostom > on_susanna (norm_group 1201 - 1212))

(9) コプト語サイド方言名詞抱合 Type II

a. $\alpha\varphi\tau\tau\omega\sigma\tau\epsilon$

a-f-tⁱ-toot-s

/ʔɛf.ti.'tɔɪ.tɕ/

PST.Σ^P-3SG.M-与える.Σ^N-手.F.Σ^P-3SG.F

「彼は彼女に手を差し伸べた」(Path: sahidica.nt > 44_Acts_of_the_Apostles_09 (norm_group 770 - 781))

b. ΝΤΕΤΝΤΑΦΘΕΙΩ ΜΠΕΥΑΓΓΕΛΙΟΝ

ntetn-taše-oeiš m-p-euaggelion
 /n̩.tə.tn.te.ʃə.'ɔjʃ m.pEUANGELION/
 CONJ.Σ^P:2PL-増やす.Σ^N-呼ぶ.Σ^A OBJ.Σ^N-DEF.SG.M-福音.M.Σ^A

「そして福音を宣べ伝えよ。」 (Path: sahidica.nt > 41_Mark_16 (norm_group 206 - 217))

Mithun (1984:860) は Type II には身体部位名詞の抱合が多いと述べているが、コプト語の Type II も例 9a のように身体部位名詞の抱合が多い。また、例 9b のように動詞の意味と縫合された目的語の意味を合わせた意味から全体の意味が乖離する名詞抱合が多く見受けられた。これはその名詞抱合された動詞が語彙として存在している語彙的名詞抱合であると考えられる。例 9a では、主語は 1 人称単数であることから、この差し出された手は 1 人称単数のものであるため、通常ならば *toot*-の後に 1 人称単数人称接尾辞が用いられるはずだが、*a-f-tⁱ-toot-s* と目的語の 3 人称単数女性の人称接尾辞がついている。この場合の 3 人称単数女性人称接尾辞-*s* は、*toot-s* 「彼女の手」で解釈されるような手の所有者ではなく、名詞抱合で形成された動詞 *tⁱ-toot*-の目的語となっている。このことから、*tⁱ-toot*-の語彙化が非常に進んでいることがわかる。

最後に、コプト語で最も頻繁に使われるであろう行為一般を表す動詞である *eire* 「する」は絶対形に比べ、前名詞形の形式は格段に小さい。この動詞は絶対形が *eire* /'irə/ であるのに対して、前名詞形は *r-* /ɾ-/ であり、母音が消失している。例 10 のように、この *r-* をギリシア語系借用動詞 (ここでは、*lupê* < ギリシア語: *lupeîn*) に接頭させて用いられる例が、時代や方言の差はあるが、見られた。この *r-* は、動詞化接辞として機能していると言え、名詞抱合から文法化が進展した一例であると言える。

- (10) εσρλγπη *e-s-r-lupê* /ɾə.sɾ-LUPÊ/ (CIRC.Σ^P-3SG.F-する.Σ^N-嘆く.Σ^A) 「それ (魂) が嘆いており」
 (Path: sahidic.ot > 72_Baruch_02 (tokens 578 - 589))

	アイヌ語 NI	ボナベ語 NI	ニウエ語 PNI	コプト語 PNI	コプト語 NI
抱合と非抱合の対立	yes	yes	yes	yes	yes
単一の韻律語の構成	yes	yes	no	yes	yes
動詞の音韻論的弱 句の「抱合」	no	yes	no	yes	yes
特定性を持つ目的語の「抱合」	不可	不可	可	可	不可
	不可	不可	不可	可	不可

表2 本稿で例示した諸言語の名詞抱合および擬似名詞抱合の差異

3 結論

以上、Grossman (2014, 2018) によって抱合 (incorporation) とされたコプト語の言語現象は 2 つに大別できることがわかった。1 つ目は、動詞が句をも「抱合」できる統語的な操作である擬似名詞抱合 (PNI) であり、2 つ目は、動詞が裸名詞のみを抱合する形態論的操作である本来の名詞抱合 (NI) である。コプト語の名詞抱合は表 2 で示されているように、オーストロネシア語族のうちのミクロネシア諸語のボナベ (ポーンベ) 語の名詞抱合に類似している。そして、コプト語の純粋な名詞抱合は、Mithun (1984:841-849,856-857) の分類のうち、Type I と Type II の名詞抱合に二分できた。さらに、「する」を意味する動詞 *eire* の前名詞形 *r-* は名詞抱合から文法化が進み、一部が動詞化接辞として機能している。アフリカ大陸の言語では名詞抱

合があまり見られないと Caballero et al. (2008:396) は述べているが、コプト語のようにアフリカ大陸にも比較的生産性のある名詞抱合を持つ言語があることは、注目に値すべきであると思われる。

参考文献

- Caballero, Gabriela, Michael J Houser, Nicole Marcus, Teresa McFarland, Anne Pycha, Maziar Toosarvandani, and Johanna Nichols (2008) “Nonsyntactic ordering effects in noun incorporation,” *Linguistic Typology*, Vol. 12, No. 3, pp. 383–421.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) “Word: a typological framework,” in Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald eds. *Word: A cross-linguistic typology*, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 1–41.
- Grossman, Eitan (2014) “No case before the verb in Coptic,” in Grossman, Eitan, Tonio Sebastian Richter, and Martin Haspelmath eds. *Egyptian-Coptic Linguistic in Typological Perspective*, Berlin: De Gruyter Mouton, pp. 203–225.
- (2018) “From suffix to prefix to interposition via differential object marking in Egyptian-Coptic,” in Seržant, Ilja A. and Alena Witzlack-Makarevich eds. *Diachrony of differential argument marking*, Berlin: Language Science Press, pp. 129–151.
- Haspelmath, Martin (2014) “A grammatical overview of Egyptian and Coptic,” in Grossman, Eitan, Tonio Sebastian Richter, and Martin Haspelmath eds. *Egyptian-Coptic Linguistic in Typological Perspective*, Berlin: De Gruyter Mouton, pp. 103–144.
- (2015) “Defining vs. diagnosing linguistic categories: a case study of clitic phenomena,” in Blaszczak, Joanna, Dorota Klimek-Jankowska, and Krzysztof Migdalski eds. *How categorical are categories?: new approaches to the old questions of noun, verb, and adjective*, Berlin: De Gruyter Mouton, pp. 273–304.
- (2016) “Coptic: a language without words,” Handout at the conference “Crossroads: Whence and Whither? (Berlin 2016): Egyptian-Coptic Linguistics in Comparative Perspectives,” February 17-20, 2016, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences and Humanities.
- Layton, Bentley (2011) *A Coptic grammar: With chrestomathy and glossary: Sahidic dialect*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 3rd edition.
- Massam, Diane (2001) “Pseudo noun incorporation in Niuean,” *Natural Language & Linguistic Theory*, Vol. 19, No. 1, pp. 153–197.
- Mithun, Marianne (1984) “The evolution of noun incorporation,” *Language*, Vol. 60, No. 4, pp. 847–894.
- Rehg, Kenneth L. (1981) *Ponapean Reference Grammar*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Seiter, William (1980) *Studies in Niuean Syntax*, New York: Garland Press.
- Zwicky, Arnold M. (1985) “Clitics and particles,” *Language*, Vol. 61, No. 2, pp. 283–305.
- 小林美紀 (2008) 「アイヌ語の名詞抱合」, 『千葉大学人文社会科学研究』, 第 17 卷, 199–214 頁。
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』, シリーズ記述文法, 第 1 号, くろしお出版, 東京。
- 宮川創 (2018) 「コプト語サイド方言の言語資料と文法注釈—ナポリ・国立ヴィットーリオ・エマヌエーレ 3 世図書館蔵・ベアサによるテキストの断片—」, 『言語記述論集』, 第 10 卷, 271–320 頁。